

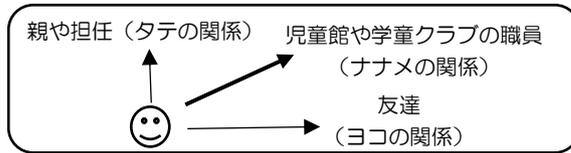
多世代の居場所「かみようがじどうかん」

取組の背景・目的

子どもの居場所、サードプレイスとして児童館が注目されている。心地よい居場所となるためには、多世代の交流と子どもの声を聴くことが欠かせないが、それを同時に行うことでより効果があると考えます。日々の遊びやイベントを通して、意識的に多世代の交流の場を作っている。その中で子どもの声を聴きながら、親でも先生でもない身近にいる信頼できるナナメの大人として子どもたちとかかわりながら心地良い居場所を目指している。上用賀児童館では職員が皆、常にそのことを意識し、日常活動から多世代で遊びながら子どもたちの意見を聞き、それを形として今後のイベントに反映することを目指している。



取組の概要



子どもたちの声から企画されたイベントを通して、子どもたちの居場所づくりを行っている。
令和5年度の児童館でのイベント（一部抜粋）

4月「入学おめでとう3days」児童館の中を探検し、新1年生向けに使い方を丁寧に説明するなど児童館利用のきっかけとなるイベントとなった。

5月「ひげボ〜スペシャル ~こどもの日バージョン~」どの世代が来館しても楽しめるよう、「ふわもこストラップ作り」や「とんとん相撲」を実施。来館している中高生の声から「サバイバルゲーム」を実施。

6月「みんなでやきやきパーティー」子どもたちが児童館でやりたいことなど意見を聞きながら、七輪を囲んで持参した食材を焼いて食べた。

7月「川で遊ぼう！夏のわくわくハイキング」多摩川に生息する生物を観察することで、異年齢の仲間づくりを行った。

8月「サマーキャンプ」2泊3日の共同生活を通して、異年齢同士の仲間づくりをすすめるとともに中高生の活躍の場となった。

9月「リアルベースボール」小学生の意見から企画。すすんで準備を手伝う子どもたちの姿もみられた。

10月「ひげボ〜☆まつり準備」子どもたちが自分たちでやりたいお店やさんを企画し、子どもスタッフとしてイベントに参加するために、準備を進めた。

11月「ひげボ〜☆まつり」地域を巻き込みながら、大規模なイベントとして実施。中高生発案のお店「べっこうあめ」や「ソースせんべい」を店舗として中高生自身が担った。

12月「ハッピーラッキー大掃除」乳幼児親子から中高生まで含めた参加者みんなで児童館をピカピカにした後、子どもたちが児童館でやりたいことの聞き取りを行った。

1月「お正月あそびウィーク」お正月あそびやマイはごいた作りを実施。子どもたちの声から実施したデコペーパー作りでは幼児から中高生まで幅広い参加があった。

2月「たまランふえすていばる」地域の児童館を利用している子どもたちが集まり、自分の得意なことを発表できる場とする。

3月「春のハイキング」こどもの国へ行き、集団での外遊びの楽しさを知るとともに、異年齢の仲間づくりを行った。

工夫点・留意点

遊びを通して、子どもたち同士の仲間づくりをすすめており、特にボール遊びやカードゲーム、伝承あそびなどを通して多世代での交流を図っている。乳幼児向けひろばに小学生が「お手伝いしたい（隊）」として活躍したり、中高生が小学生に混じって時に真剣に、時に手加減しながら遊んだりするなど積極的に人とつながる姿勢がみられる。

また、上用賀児童館のアットホームさは各世代が集うために役立っていると思い、職員全員が意識して取り組んでいる。受容を基本とした関わりを徹底し、否定しないで聞いてもらえる心地よさを感じてもらえるような環境、職員同士のチームワークを大事にすることで、あたたかみのある児童館をつくっている。

そして、多世代の子どもたちの中で自由に自分の思いを言えるような雰囲気職員が積極的に作り、話に耳を傾けるようにしている。



取組の効果

子どもたちが児童館を居場所として考え、遊びという目的にとどまらず、いつもいる異年齢の友達や職員、地域の若者に会いたいから児童館に行くという理由に効果が表れていると感じる。

継続して異年齢を含めた心を通わせる関係づくりを進めていくことで、自然と年上が年下の面倒をみて、大人が介入しなくてもけんかの仲裁をしたり、慰めたりする姿もある。ナナメの大人ならぬナナメの兄、姉たちの存在が誕生している。

そうやって育った小学生が中高生になり、今度は自分たちが年下の面倒を見るようになる。そしてまた何年か経ち、彼らが今度は親となり自分の子どもを連れてくる。その連続が児童館の醍醐味である。また、学童クラブとの連携を深めることで、学童クラブの中にも、多世代のごちゃまぜの中で遊ぶほうが楽しいという児童もあり、そのような児童にとっての居場所にもなり得ている。子どもひとり一人の特性に合った居場所を提供する大切さを実感している。



課題・今後の展開

児童館に来館している子どもたちのやりたいことを日常活動やイベントとして実現しているが、当日までの準備や運営まで一緒に多世代の子どもたちと行い、さらに主体性を持たせることで子どもたちから出た意見が形になることを広く知ってもらいたい。

また、児童館をまだ利用したことがない子どもたち、ほとんど利用したことがない子どもたちにも、多世代が集う児童館の存在をどんどん発信していく必要がある。

今後も子どもたちに主体性を持たせつつ、地域や関係機関と連携しながら進めていく。

